神田伊織、二ツ目昇進祝いの会

日　時：2022 年 11 月 12 日（日）14 時 15 分開演
会　場：日本橋社会教育会館ホール
出　演：おりびあ、伊織、香織（司会）／ゲスト：麻生子八咫（活弁士）

開演に先立って正体不明の老婆が、何やら叫びながら下手側の後部客席より舞台前まで来て、上手の舞台に登って、そのまま退場。後でこの老婆の正体が、この日のためにだけの特別のメイクをしたゲストの麻生子八咫であったことが明らかになる。

● 神田おりびあ、『名槍日本号と母里太兵衛』（前座）

今回で三度目彼女の講談を聞くが、声の硬さも大分取れてきて、発声も丸くなってきたように感じた。演目は、黒田節で名高い母里太兵衛が福島正則から名槍日本号をもらい受けるに至ったなじみ深い話で、ついのめり込んで、楽しく聴き入らせてもらった。今後が楽しみ。

● 神田伊織、『腰元彫り二代目濱野矩随（のりゆき）、恋の彫物』

この演目は、今年 5 月に阿佐ヶ谷ワークショップ主催・神田伊織の会で一度聴いているが、先月（10 月）、場所も今回と同じ日本橋社会教育会館での神田香織一門会の公演で、神田織音が『浜野矩随』と題して語っていたこともあって、話の展開の異なった部分に興味がそそらされた。

● 香織師匠と伊織の対談

神田伊織二ツ目昇進を祝って、香織師匠が伊織から話を聞き出す形での対談で、隠れた（？）秘話などを聞かせてもらった。そのなかで、香織師匠が戦争ものを題材にした演目を語るようになったいきさつについて、師匠が二ツ目に昇進した時サイパンに旅行したのがそのきっかけになったという。伊織は、二ツ目に昇進して佐渡島に旅行したが、今後の自分の目指すものの発見には至らなかったと言いつつも、自分が専攻した仏文学の作品を素材にした演目の新作や、埋もれた古典の掘り起こしをしてそれを新たに自分なりにアレンジして演目に取り上げていきたいという抱負などを語った。

―中入り―

● ゲストの麻生子八咫による活弁、『ロイドの蛮勇』

タイトルの記憶に自信がないが、内容的にはそんな意味。昔の活動フィルムを映写しながら麻生子八咫が昔の活弁士さながら台詞を語る。活動フィルムの合い間に、老婆に変装した子八咫の顔をアップに映し出して、神田伊織の名前を出して、子供時代から弱虫で臆病者のロイドを励ます場面を挿入しており、その工夫の妙案とおかしみをたっぷり楽しませてもらった。

● 神田伊織、新作ネタおろし『東京大空襲』

伊織が直接聞いた一人の老人男性の淡い恋の思いで話を通して東京大空襲の惨劇を語る。戦争シリーズを語り続ける師匠への恩返しを込めての演目に感じられ、伊織の師匠への感謝の誠実な気持ちが伝わってくる気がした。